

# 活躍する明専会員に聞く⑦

三菱製紙株式会社 代表取締役社長

## 立藤 幸博(化58)氏

聞き手

九州工業大学工学研究院  
物質工学研究系 准教授

エスメント関東株式会社  
取締役営業部長

ユニクス株式会社  
代表取締役

九州工業大学工学研究院  
物質工学研究系 教授

佐藤 しのぶ

水野 俊一(化58)

竹林 貴史(化58)

竹中 繁織(環57)



―今回は三菱製紙の立藤幸博社長に  
お話を伺いたいと思います。まずは、  
大学時代の思い出をお聞かせくだ  
さい。

大学時代の思い出といえば、私は  
寮に入っていました。寮の思い出が  
強く残っています。明専寮は当時8  
つの寮がありまして、私は桃源寮に  
入っていました。寮に入ると、夜中  
に起こされて巻頭言から始まり、寮  
歌を歌っていたのを覚えています。

寮には3年生まで残っていました。  
昔は宴会が始まっているにも関わら  
ず、横でレポートを書かなきゃいけ  
ない、という辛さがありましたね  
(笑)。レポートの提出は厳しかった  
ですね。研究室では大変厳しい坂田  
研に配属されまして、そこで勉強と  
いうのはこういうものか、と身につ  
いたような気がします。

―明専寮も2009年に廃寮になり  
ましたが、2013年より新寮の運  
用が始まり、成績優秀者が入寮でき  
るようなシステムになっています。  
昔の良い伝統は残っていくのだなど  
思いました。当時の九州工大は大学  
院に入るのが大変難しかったと伺っ  
ていますが。



研究室の同僚とともに(左から2番目が本人)

そうですね、大学院入試では大変  
勉強しました。大学院では教授がご  
病気のため不在でした。そして、准  
教授の1年間の海外留学も重なりま  
した。学会発表等は自分たちで切り  
拓いた感じですね。苦しかったとい  
えば、苦しかったですけど、それも  
いい試練になったかなと思いますね。  
―就職先として三菱製紙を選ばれて  
いますが、当時の三菱製紙について  
教えてください。

三菱というのは、三菱重工、三菱  
商事、三菱UFJ銀行がいわゆる御  
三家で、ほかにも三菱が名について  
いる企業はたくさんあります。製紙

会社の中でも、三菱製紙は特殊な会社で、当時「技術の三菱」と言われていました。私が入社するころの「日本のエクセレントカンパニー 50社」の中に含まれていました。新聞やトイレットペーパーといった、エンドユーザーが使うような紙は作ってなくて、感熱紙、感圧紙、磁気切符などを作っていました。また、高級な印刷用紙は作っていましたが、一般の人はあまり知らなかったですね。就職担当の先生の紹介で入社試験を受けました。

—実際に入社してから社長になるまでの印象的な出来事などを教えてください。

社長を目指して、働いてきたわけではないので(笑)、目の前にある仕事を一生懸命やってきたというのがあります。製紙会社は現在、素材としての紙の需要がずいぶん減っています。特に、情報メディアとしての紙は、2006年、2007年をピークとして、3分の2程度に減少しています。我々が入社したときは高度成長期で、フル稼働のマシンに改造を重ねて、増産するという感じでした。正月もなく、会社に泊

まり込むような感じでした。2000年になると、衰退産業になり始めて日本の経済と同じようになっていきました。大学の同期は30名くらいいて、理系はだいたい研究や技術に配属されるのですが、私は製造部に配属されました。製造部に入ってから、社長になる直前までずっと製造畑で過ごしてきました。入社して兵庫県高砂工場で14年、東京の本社に半年、ドイツの工場に3年、青森八戸工場に2年、最後に兵庫県高砂工場に戻り、工場長になりました。その間ずっと工場、製造にかかわっていました。

—海外ではいかがでしたか。

海外(ドイツ)では、街中はドイツ語ですが、工場内でのホワイトカラー(管理部門)では英語でした。彼ら(工場のドイツ人)も、母国語ではないので、お互い様ですね。コミュニケーションは取ろうと思うと、なんとかなります。

—ご家族も一緒に赴任されたのですか。

私が先にドイツに来て、あとから妻と6カ月の子供に来てもらいました。予防接種も日本とは違っていて、小児科を探すのも大変でした。私が

行った工場は、ビーレフェルトと行ってハノーバーとドルトムントの間(緯度は樺太のちょうど真んくらい)なのですが、寒いときはマイナス20度くらいですね。冬は朝の10時にしか明るくならないし、お昼の3時くらいには暗くなるので、冬は本当に大変でした。私は会社に行くくと、英語のしゃべれるドイツ人の同僚がいますが、家内は当時インターネットもないので、苦労していましたね。

—海外での3年では何をしてきましたのですか？

装置を据え付けに行っていました。感熱紙を作る機械を据え付け、ドイツ人技術者に技術供与していました。—九州工大では海外で活躍できる学生を育てようと海外派遣プログラムを充実させています。いま、コロナ禍でなかなか派遣ができない状況ではあるのですが、今後海外交流の重要性はどう変わるでしょうか？

海外との境目はもうなくなるのではないのでしょうか。今朝も私はニューヨークとWeb会議をしました。E.Uとは夕方会議を行っています。今は海外に行けないので、

Web会議ですね。物理的な距離がなくなっていますね。国内でもWeb会議を推奨しています。パソコンさえあれば、世界どこでも仕事ができるという状況ですね。

—時差はつらくないですか？

いえいえ(笑)。私に合わせてもらえるので、大丈夫です。

—それでは三菱製紙の今後の発展について、社長としてのお考えを少しお聞かせください。

情報メディアとして、三菱製紙はすごく強かったのですが、残念ながら需要が減ってきていますので、新しい機能材料の開発へシフトするようになっていきます。素材産業として新しい機能材料関係を進めています。例えば、海水から淡水に変える限外濾過膜やリチウムイオン電池のバッテリーセパレータなどの膜などですね。我々がかつてから持っていた技術を機能繊維に反映させています。現在それらが少しずつ成長してきています。あとは、紙としては情報メディアからパッケージング、ラップなど別の紙を考えています。また、脱プラについても着目しています。食品のトレイなどプラスチックから耐水

## インタビューシリーズ

性、耐油性のある紙トレイなどを開発しています。ドイツなどはすでに採用されていますが、EUは日本よりも環境に厳しいので、紙にコーティングして、プラスチック包材と同じような機能を持った水分や油分を通さない、さらに酸素も通さないような紙を作っています。例えば、ポテトチップスの袋が紙になったようなイメージですね。ドイツでは採用されていますが、残念ながらプラスチックより少し高いため、日本ではまだ本格的に採用されていないですね。どうしてもコストが高いので、どこが最初に採用していくのか注目しています。そのように業容を変えていっています。

一方、パルプという素材はすごく面白くて、酵素と酵母を用いて糖化発酵させてバイオエタノールにしたり、糖液からポリ乳酸にしたりというバイオプラスチック材料にできます。これらも従来のプラスチックに比べると、ずいぶん高価ですが、これらはカーボンニュートラルという考えからすると、原材料は木ですし、分解するので、カーボンニュートラルには合っている素材です。それら

の展開を考えています。また、糖化されたものから水素をすることもできます。それらが成功していけば、我々の会社もまた状況が大きく変わると思っています。なかなか難しいのですが、難しいことこそチャレンジのし甲斐があります。

「持続可能な社会、SDGsに合致するような新しい機能材料を開発されているのだなと思いました。企業ではコストをまず考えないといけないですが、今後コストではなくまず環境を主として考えないといけない状況になるような気がします。」

現在はCovid-19で厳しいのですが、この状況が収束したら、次はDX（デジタルトランスフォーメーション）、GX（グリーントランスフォーメーション）、そしてカーボンニュートラルへ切り替わると思っています。世界は一気に変わると思います。最後に、九州工大生へのメッセージをお願いします。

会社に入ったときによく言ったのは、大学時代の勉強で一生の飯は食えない、会社に入ってからが重要だ、と思っていました。ただ、大学時代に「このようなくことを勉強した」と

いうような、一つ長けたことを身に着けたほうがよいと思います。入社してからは、みんなスタートは同じです。あとはどれだけ入社後に、吸収できるかだと思います。また、大学時代の一般教養は大事にしたほうがよいと思いました。最近採用すると、理系の知識は大変あるのですが、一般的な知識がない人もいます。そのような学生を見ると少し心配になります。人間は生きる上で哲学的な

芯を持っていないと、なかなか難しいのではないかなと思います。流されて生きるのとは簡単ですが、これだけは譲れないというような、ぶれないものがあると、何かあったときにも大丈夫だと思います。会社は、学生と違って、厳しいこともありますが、そのようなバックボーンがあると、大丈夫だと思います。



インタビューの様子